

白 叙

腦中に名譽と利慾の外更に何等の觀念もなきもの、我利我利眼

以て、此書を觀る時は、算盤の桁に掛るとか掛らぬとか、論理に

合はぬとか、實際にどう蛇のこう蛇のとの批評も有ませふが、元

來眞理と云ふものは、世の聲色に感濁するものゝ、容易に知り得

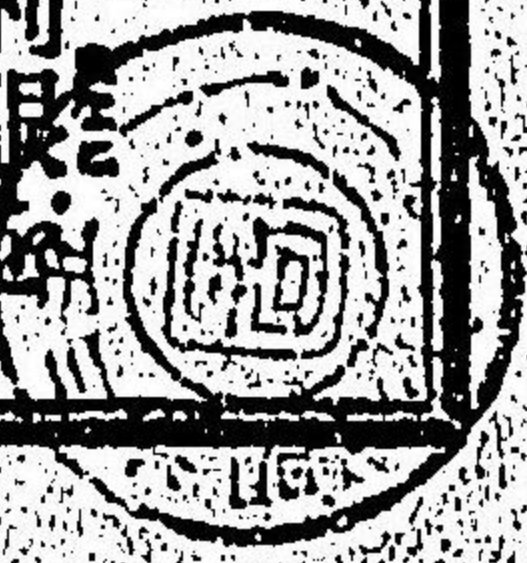
べきものではない、御教祖の如く、一代九十年の歴史は毫末の汚

點もなく、社會の爲に、家財を擲ち身命を犠牲にして、幾度か生

死の難關に出入して始て聖靈の感通を得給ひてより、内外洞徹八

面玲朗たる天理の大光明を放ち給ひたる者の外、何人能く這個

の消息を解するものぞ、論者或は先其の教祖の言行が河漢の如く



極りなく、ただ逕庭して人情に遠さかれりと笑ふならん、成程尤
である、然し莊子と云ふ本にこう云ふ事がある、北海に魚あり其
名を鯢と云ふ、大さ幾千里あるか量られぬ、化して鳥となる其名
を鵬と云ふ、鵬の背幾千里あるかわからない、怒で飛ぶときは其
翼垂天の雲のようである、南冥と云所に徙らんとして羽撃をすれ
ば、水の迸潑ること三千里の遠きに及び、勢に任せて空に飛翔る
こと九萬里の高さに達ると云ふ、すると螭などの小鳥が之を聞き
て、莞爾と笑て云ふのには、我輩奮起して柳の梢に突至らんと欲
するも、時には至ること能はずして神惱み身疲れて軀體を地上に
投げ落す事さへあり、況や大鵬の如く九萬里の高天に翺け升り、

遠逝なる南冥に迄行く抔とは念も依らざる空事よと嘲弄した僧で
ある、

實に朝開て暮に落る、木槿の花は朔日晦日のあることを知らず、
春生て夏死し、夏生て秋死する、ひぐらしせみは、兎ても春夏秋
冬の四時の循環がわかるまい、本より瞽者に團十郎の觀劇を憐め
瞽者に越路の淨瑠璃を説くが如きは、抑も説くものゝ過失では有
まいか、老子も下士は道を聽て大に笑ふ、笑はざれば以て道とす
るに足らずと云ふ、誠に千古の格言である、

予茲に、教祖の御遺訓に基き、十二下や御筆先の金科玉條を經と
なし、御教祖が靈救宣布のために、血の涙に咽び給ひたる御偉蹟や

現今の某布教師又は某信者杯が、いかに御道のために苦勞せられ
 つゝあるかと云ふ、悲惨極る活劇を緯として、血の涙と名くる一
 小冊子を織成たのは、世の篤信心家と共に愈信仰心を温め又は未
 信者を誘導し、自他共に高潔圓滿なる神人合一の境界に到らん事
 を、期するので有て、予は元より商人でなければ、本書が、算盤
 の桁に掛るか掛らぬか、學者でなければ論理に合うか合はぬかは
 知りませぬ、唯腦中に血あり涙あるものゝみ予の知己である

明治三十五年十月二十六日

編者 しるす

布教熱心血の涙

眞木宥馨著

啞物を言た御靈救に付て布教家平生の心得を諭す

和歌山縣海草郡紀伊村大字上野、高瀬彦太夫と云者の娘に春菊とて本
 年廿三歳に成升が、哀れ生て二十三年の春秋を経て今日に至迄否本年
 三月廿七日迄耳も聞へず言葉も通じなかつた天性の啞聾が大神様の御
 蔭を以て僅か一週間にして耳も聞へ口も利る様になつたと云事に付て
 大に布教師たる者の御参考にも成らば結構で有と考へらるゝ事が胸に
 浮び升たから茲に一席の御話をさして頂升

○布教熱心血の涙

偕て御道の布教師と名のつく者は他宗教の先生方の様に學問や辯論を以て教理を振舞すのではなく、唯眞實一心を以て教理を説て罪ある人を悔改るの心を起さしめ、唯眞實一心を以て死に瀕せる病人を救助るので有、而て布教師は皆御本部へ九度の別席を運で、神様より御授を頂戴して居のである、其御授は實に靈救の精神脳髓である、御授なき者は完全なる布教師としての資格が無ひのでム升、御授は實に殺人劍で有ば又救人繩で有若し、一步を過れば人をして死地に陥し入れ眞實を以てせば死より蘇生る實に世界無類の寶物でム升、嗚呼此の山紫水明沃土豊饒風俗敦厚なる大八洲瑞穂國を後にし温々として春の日よりも暖き父母恩愛の羈綱を絶ち三界の枷輪廻の媒たる最惜可愛き妻や兒に盡ぬ名残を惜みつゝ死に行身を譬れば仇が原の道の霜一足づゝに消

て行く哀れ墓なき病人も三三九度の御授の御威徳を以て蘇生事恰も世に云清盛が音戸の瀬戸に於て大陽の將に山の端に傾き今や西の海に没せんとするの一刹那清盛が日の丸の扇を以て招き戻たと云程の不思議なる御利益が随分澤山有のでム升、斯る尊き御授を頂て居ながら人に依るとてんと棚の上に仕舞て一軒のにはひ掛一人の御靈救すらせぬ人が有升、是らの人は近欲に奔て我利我利一邊に凝固るからで有が、併し却て禍の種と成て家内に病死あるか、財産を蕩盡するか餘り出世をした人を見受ません、之を譬ればかう成のでム升、茲に一人富豪の人が有て其長男に三百圓の金次男と末子には貳百金宛を與て自分等老夫婦は全國の名所古跡の漫遊に出掛升て一年の後に歸て來升た、所が次男が父母の前に跪て私は父より授りたる貳百の金を資本として兩の

晨に風の夜に孜々として商業に勉強致升た所、幸に百圓儲升て參百圓に成升たと云て父の前に差出升た、父は大に歡び汝は寡かなる事にても親に孝行なり更に汝に參百圓を與へん、次に三男も又父の前に跪き父よ聞れよ、我父より賜りたる貳百の金を資本として寒風凜烈の冬の日も炎熱蒸すが如き夏の日も倦ず撓ず商業に勵精致升た處御蔭を以て三百五拾圓に殖升た、其は何より結構な事の有汝は一番年少なるに頗る事に勉強をするし又至て孝行である、ヨレ進でやるべし更に三百圓を増して遣ふと云て居處へ長男は懼る懼る出て來り父よ我父より三百圓を與へられたれど若し商業に失敗をしては父は過酷なる人なれば如何なる叱責を受もやせんと金を瓶の中に藏て土中に埋め置けり、今恙なく堀出て此通り三百の金には疵が附て居ませんと云て差出升た處、

父は憤然として怒り、汝愚蒙なる者よ損亡を恐るゝ成は何故に之を銀行に預け置ざる汝の如は到底我財産を相續するに絶へずと其半額を取戻して更に彼の二人の弟に頒ち與たと云事でム升、故に有ものは益々與られて豊に成り無き者は益奪れて不自由をせねば成ません、御授も其通り多の人を救助れば救助るに隨て益々不思議なる御靈救を蒙り、又其丈の利益功德を積む事に成のでム升、で有から御授を遣ぬ時は却て禍を蒙る様に成ので御さい升、何者初試験の始より満席の終に至迄多の人を救けさして貫升と云の誓約を神様にして有のであるから全く神様を欺き奉る事に成るのでム升、天地の主宰者たる神様を誑す様では生涯頭の上り相な道理がない

偕て當席は御授を遣ぬ人の事は暫く措き熱心なる御授持に御話がした

ひのでム升、云迄もなく御授持は人の生命を助け人の病氣災難を助け
凡て其人の現在及未來を靈救る所の大責任を有する者でム升から、自
分の生命財産を投擲だけの覺悟あるに有ねば兎ても御靈救は出來ない
のである、本より如何なる危難困嶮も辭せず讒誣中傷嫉妬怨恨あらゆ
る淨世の虐遇酷待も辭せず、御教祖が山阪やいはらぐるも、かけもち
も劔の中も通り抜たらと、御諭し下され升たる通りどんな路も通らに
や成らん、世の諺に死に病と錢儲ほど苦しき者はないとやら云事がム
升が死病は自分一人の事、錢儲は馬鹿でもして居升が、人の病氣災難
を救ひ人の死する命を繋ぎ止ると云事位世の中に六ヶ敷事は有升まい
如何なる學者大人英雄豪傑でも此事ばかりは出來るのである、其學者
大人英雄豪傑も出來ぬ事を一文不知の我々垢凡夫が容易く出來ると云

のは何と名譽な事でムませんか、併し名譽であり漠大な功德も有丈其
仕事は却々困難である、何れ人の命を救ると云の場合は自分の生命を
捨て、其身代に立の大決心大覺悟を有する人でなくては到底救けられ
る者ではない、船頭が人を船に乗せて海上を渡らんに、客若し過て海
中に墜落せんに之を救けんとする船頭が棹を突出て之に縋れとか足下
に注意せぬから落たので有なんて昏て居たのでは其人を救命事が出來
升まい、此場合には是非赤裸體に成て自分の身を海に投じて死を決す
るに有らずは何の益にも立たないのでム升

亦御道は話一條の御靈救で有から借物塵埃因縁の三の理を説て聞さず
ば利益がないとは云者の、或場合には御話の出來ぬ事あり亦其功の無
き事もある、現に死に瀕せる病人に對しては兎ても御話は出來升まい

啞聲杯には御話は無論駄目である、本より御話が人を救るのでなくして身分の信力を神様の御威徳に依て救かるので有、其上病人其者の信仰あらば鬼に金棒大丈夫である、御筆先に、どのやうな六ヶ敷なる病でも、此なほらんと云でないぞや、とある、また、いかほどに六ヶ敷ようと思たとして月日引うけあんなないぞや、と吾々が案知心を出して平愈するかせんかと心配をして居ては、神様が其心に乘て働く事が出来ぬから、月日親神様が引請から猪の如に側眼振らずに奮進せよと、御さとし下されたので有ませふ、問へば云ふ、問はねば云はぬ達磨殿心の中に何もなければ、俗謡に、鐘が鳴るかや撞木がなるか鐘としゆもくの間がなる、と有升天地を我物にしたる達磨であるから眞理を問人あらば蕩々乎として懸河の妙辯を振ひもするが問人なくば寂々寥々

として何の音もない、知恩院の鐘は囂々として其聲天地に響く去と撞人なくば聞として何の音もない、鐘は以て神様に譬へ撞木は以て罪人に譬へ鐘つき房頭は以て布教師たる我々として熟考して御覽なさい此間に無限の妙味が有るのでム升

御話は始に戻り升て啞の物を云た事に移り升が、渠の高瀬彦太夫と申人は、紀州家の郷士で有升て名字帯刀は無論の事其近郷近在では門閥家として豪農として誰知らぬ者は無いのでム升が、其祖先が如何なる罪惡を積今又彦太夫が甚麼罪を造り升たのか其邊は別に聞ては居ませんが、併し煙の有所には必ず火のある者なれば、此夫婦二人の者及び春菊に於ても前生より現在に掛て毛頭罪のない清淨無垢な者とは保證は出来升まい、何れにしても春菊は明治十三年庚辰の年に生て廿五年

の三月迄耳も聞へず又一言半句も物が云へ無たので有升、彦大夫は性質律義堅固なる者で有て妄に神佛に迷ふ男ではふませんが、流石は親子の恩愛と云者は奇妙な者で若も救かりたならばと僥倖を千一に期して近くは高野山の弘法大師長谷の観音春日の明神遠くは下總の成田の不動さんに願を掛け、有ん限の信仰を致升たが、鐘の無いのに檀木を搗き涸れたる井土に水を汲如く何の應答もなく又天性の啞が醫師の手術に依て物を言たる試は無れ共是も千に一の僥倖を得ん者と随分可惜金錢を費消しては見た者の底なき穴に水を灌ぐ如く何の功驗も見へません、詮術盡て思案投首の末嗚呼我過てり過てり、曾て屢々御寺詣の説教の筈に侍て因縁因果の理を諭されて定業は轉じ難しと聞者を、唯娘の愛に溺て廿餘年も徒にきのふと過ぎ今日は空く暮れんとす、一生

は唯夢の如し誰か百年の齡を期せん、萬事は皆空しいつしか常住の思を成さん、命は水上泡風に隨て經めぐるが如し、魂は籠中の鳥の開くを待て去に同じ、消る者は二度見へず去者は重て來らず須臾に消滅し刹那に離散す、暫く目を塞て往事を思へば舊友皆亡ぬ、指を折て故人を數ふれば親疎皆かれぬ、人止り我行誰か又常ならん。三界無安猶如火宅、いでや我是より髭を斬り身を墨染に文成して、如し娘の冥福を祈らんにはと、沈思默考氣も鬱々たる折柄全郡山口村にある堺支教會所部内里出張所の役員某々等が参り、先自暴自棄して遁世的思想の不合理なる旨を諭し、大神様の御慈悲の深く厚き由を説き、更に現在を捨て未來にのみ傾の不可なる所以を諭じ、古人もあさましや人界に生を受ながら、斯る憂世に明暮し、身を苦しむる悲さよは、いかなる人の

言の葉や、先生身を助てこそ佛身を願ふ便もあれと、云はれたる通りまづ生身を助けぬ事には未來の程は覺束ないのである、文盲の人が他より來る書面を某先生の前に出て讀んで聞して下されと云ふ、先生頭を搔ながら僕は夜分に字を習た者故白晝には讀ませんと云ふ、白晝によめぬ者が夜分に讀る道理がない、彌陀如來は未だ現在を救た話を聞ず某でも未來は果して救かりませふか覺束ない次第である假今又未來は必定御救に預た所が、現在人間が病床に苦痛を忍び、七十八十の高齡を保つ可き者が無理に三十や四十の世持盛に死たればとて格別彌陀如來に對して忠義にも成まいし、又御立服も有まい夫れ未來を大事に思へば猶更現在に於て罪惡を滅して置ねば成らるのである、盲目の儘で死し跛者の儘で死し啞聾の儘で死し肺病の儘で死ぬ程の人は惡業の多

き事は勿論また其罪が消滅して居らるので有から、是非神様の前に懺悔して其罪を滅し無病壯健の人と成て長壽を保つ可きであると懇篤に教理を説き聞升た處漸くに納得をしてそれでは、御授をして下されと云たのは實に本年三月廿二日の事で有升た

是より先き里出張所の役員は擔任藤本氏を始め副擔任福田氏其他清水西村の諸氏は血を御教祖の間に啜て誓約を成すは、我等四名の者は緩急相援生死を共にして道の爲に盡さん事を期す、就ては世上の罵詈謗の如は本より念頭に懸ざる事なるが肝心命を繋ぐ食物に事を缺く事あるも四人揃て成は十日は廿日に及も辭する所にあらずと、盟約を致升て爾來寒風烈く骨身を刺す程の夕へも吹透の野原にある井土端に於て數十杯の水垢離を取て各病人の御靈救を祈り朝は必四時に寢床を離

て神床を祓浄て四時半と云に御勤を成し終て近くは十町内外遠くは二
三里の所へ布教に出掛升る、其出發の時に茶を湧して朝飯を認んとて
飯櫃を披て見とからからに成た飯粒が一皿位残て居る四人の者が互に
顔を合して莞爾と笑て瓢然として出て行く、其後姿を妻女が眺て思は
ず潜然と涙くむ事も時々有た相にム升、出て二十丁ばかり南に行くと
有名なる吉野川の下流紀の川でム升、まだ寒月山の端に春掃霜結て堅
氷の如く、川風寒く耳を裂くばかりのさむさに渡守の夢を被るも可愛
想、否懷中には一厘もなきに船頭を起せば渡錢を如何にせん、遂に赤
裸體に成て衣服は頭上に縛り附氷を碎き水を踏で漸に向の岸に上り、
よう／＼此處は病家の門前やれ娛れしやと立寄は門の扉は締てある戸
を叩も氣の毒と躊躇して居と突然犬が吠立る、一犬影に吠て萬犬其聲

に吠ゆとやら、忽にして鬻々として四方犬の聲、逃ては賊かと怪れん
停立て居て人目に掛るも何となく面目にと、氣兼する身は厭はねど何
卒此家の病人をと、眞實慈悲の眞心を、大神様が御嘉納下さるゝ者か
如何なる病人も平愈せぬと云事が無いと云程でム升

右の啞の處へも廿二日より廿七日迄通ひ升た處何の功驗も見へませぬ
故歟、彦太夫は御氣毒ながら態々御通ひ下さるも却て勿体ない様に思
はれ升から教會の方で祈禱をして下されと体よく謝絶をされ升た、茲
が大事な處である道の淺き人は概ねこふ云場合に精神が惰けて再び其
家を顧面のでム升、去れど眞實親子兄妹としての愛情を持つ時は益々
氣を勵して粉骨碎身を致すべき者で有ませふ、渠里出張所には斯く謝
絶をされたるは全く自分の眞實の足らぬから、大神様の御しかりを受

たので有ふと評議して直に神前に懺悔を成し其晩より啞の爲に特別の御勤を成し其又啞の身代に立ん事を 神様に誓ひ升た處、不思議や翌未明に彦太夫自ら出て来り叩頭拜謝して先生不思議に御利益を頂き升た、娘は今朝火鉢と云升たと云て早や涙ぐむ、役員一同大に力を得て一層精神を籠て御願を懸て居升たが、越て四月の二日に到り、娘は機を織もて頻に耳に痛を感じて哭て居たが其日又役員到て御授をすると痛苦直に止と同時に今迄聞へざりし耳が能く聞こへる様に成り其翌日よりランブ時計と教るに従て單純なる語句は覺束ながら言ひ得様に成り、彦太夫は歡喜の餘り去る五月十八日を以て御本部に詣て、親く四人棟領の御一人なる高井先生より御話を承り益々神徳の廣大なるに感激して居と云事でム升

やしきの、つちをほりとりて、ところかへる、ばかりやで、と神様の御言葉の有處より恐察すると、此啞も物を言日に云たのでなく救る日に救かりたのでなく、斯る不思議なる御靈救が出来るだけに其迄に出張員が長々と辛苦艱難をして來た結果であらふと思れ升

我身を捨てずば人の生命を救ふこと能はず

前席にも申升る通り、我身を捨て、こそその人の命をも救ふへけれ兎ても船の上に安座して居ては海中に沈溺したる人を救ふことが出来ません例へば或老人酒に泥酔して途を踏過りて深き井土の中に陥落せり、聲限命限に救を求て居升た處へ通り掛るは誰あらふ、美々敷洋服を着飾り金皮時計を胸間に閃し、シガーを燻へもて出て來る實に堂々たる當

世の紳士である、上より覗き見て冷笑して曰く、痴漢奴足下に氣を附ぬからである、今更愚頭々々云ても仕方がないよと平然として去る、次に來るは何宗の御方が緋の衣に紫の袈裟を纏ひたる最も尊き御出家が其訴る聲を聞いて錫杖を止め上より覗き見て云はるゝには、さてく汝は可憐の者よ餘程前世に於て罪を造りたる者と見ゆ、去と事茲に至ては是非なき事唯何事も前世の因縁と諦て、念佛を唱て未來の冥福を祈られよ、我も亦廻向をして遣はさんと高聲に念佛を唱る事數十返にして徐々として進み行く、偕て最後に通掛りしは何人で有ませふ、品格も無れば學問もなく黒の紋附の羽織を着たるはよけれ共加之も羊羹色の實に氣の利ぬ天理教の布教師である、其哭聲を聞や否や駈寄て有無の問答も有はこそ、くるくると赤裸體すばんと飛込井土の中漸にし

て救ひ上げ、喉ぞ寒かつたで有ふと我衣服を脱で着せ最寄の茶店に飲食を勧め、さて貴殿は災難に罹り誠に危き事有た、其と云もほしひをしひの欲に泥酔して居からの事、今後は餘り大酔は成さらぬ方が御身の爲でム升、兎も角も酒の酔の醒る迄私と同道して参りませふ、私則天理の教と共に歩む時は大丈夫で有と云のは、御教祖の足跡で有て亦各布教師の日日實行して居のでム升、此通り人の生命を救けんとするには、是非に自ら裸體に成り自ら生命を捨てん事には助ける事が出來ないのでム升、昔は釋迦も孔子も耶蘇も皆裸體に成り生命を捨て、人を救たのでム升、御教祖は大和國山邊郡三味田村前川半七正信様の御家に御誕生遊されて、文化七年九月十五日の夜全郡庄屋敷村の中山善兵衛様と御婚儀を結ばれ、御歳はまだ十三歳の花の蕾年長るに隨て

天性の艶容麗顔皎齒明眸の佳人が愈々香を添へ色を増して得も云れぬ風情を示し加に資性聰敏にして才識兼備り婦として貞烈の譽れ高く、實に正直律義なる善兵衛様の好伴侶でム升たが、御歳三十一の時隣家に足立某とて大庄屋の職を勤る人の倅に當年二歳に成る源四郎と云が有升て其母の乳汁の足ざる故日日に衰弱するを可憐に思し召されて自ら乳哺御養育の任に當られた、我兒でさへ乳飲兒を育つるは厭な者なるに頼まれもせぬに人の子を育ると云は一列は兄弟なり我兒なりと云の觀念の有に有らねば到底何人も出来る仕業ではムません、然に其頃黒疱疹と云惡疾が非常に流行致升て十中の八九は皆死亡致升た、處が此源四郎も其病に感染し愈々重症に陥て醫藥の功驗更になく餘命は殆ど旦夕に逼り來る、如何に蜻蛉のゆうへを待ち、夏の蟬の春秋を知ら

ぬも有とは云者の、人と生て僅に二歳を過ぎて死なしては折角人界に生た甲斐もなく、父母の心も嘸かごと不憫の事に思ほし召し、雨繁き晨風暴き夕へ奈良の二月堂の觀音様、武藏野の不動さん、石上神社に素足詣りを致升て、祈誓を懸升るは頼れもせぬに人の兒を預り天命とは云者の斯る惡疾の爲に死なしては、其父母に對して何と申譯を致すへき、御無理の御願ではム升が我兒二人の生命を身代に立て升、猶妾の命も差上升るから何卒源四郎の生命を御救助に預り度と血涙を滴しその御心願でム升たが、實に至誠天地を動すとやら、神佛直に感應まし升て切れ掛りたる玉の緒も難なく繋止て九死の内に一生を得升たが其所謂身代に成た者か其後二年を経て御子安子様四歳にして死し、御歳三十六歳にして常子様御誕生成されて三歳にして死去致され升た、

御教祖の御慈悲心に厚きは天性で有てまだ神掛のなき以前より斯様に憐愍を人に加へられたので有升、御教祖一代九十年の間御苦勞成た事柄は別に又題を設て御話を致升が今日は我命を捨てん事には人の生命を助くる事が出来ぬと云實例を引證致升た次第で御ざい升私曾て羽前の米澤に遊た事が有升たが、其近在に高畠町と云あり、其高畠の隣村の二井宿村と云に一泊を致升た、此邊一体を御領と稱て昔は徳川家の直轄で有た相にム升が、此村に昔時一人の義民が有た、名を高梨利右衛門と云て名主を勤る者で有たが、或時御領三萬石を幕府から上杉家に預升た所が上杉家の壓制なる二柵を遣て御領地の年貢米は形の大きな柵で取立るのみか、何か口實を設ては税金を取立言語道斷の虐政を施したので領内は非常に困窮に及び細々と炊煙は上り兼、

妻を賣て貢を納れ兒を賣て老を養ふと云の非運に逼て唯モ一枯死するを待ばかりで有た、是に於て利右衛門は奮然として起ち單身江戸に出て、上杉家の非政を訴んとし、先妻子を招き訣別の盃をせんとしたるが、流石の利右衛門も人情には克がたく如何に萬人の爲とは云者の今江戸に上り上杉家を相手とり、訴訟をしては何れ死罪に處せらるゝならん、去ば今は生別又死別を兼るの時是が今生の暇乞かと、思へば胸は一杯に成り言はんとして語塞るを、妻女は爛眼早くも良人の音容常ならざるを見て温顔靜に良人を勵て曰く、良人の苦悶は御領内の虐政に就て有ませふ、妾曾て聞く死生命あり富貴天にありと、去ば我身で我身が自由に成るので有升れば寧此際身を擢て、萬人の爲に犠牲に供へては如何でム升、丈夫當に死すべき時に死せざれば羞却て死より

も烈き事ありと、涙を吞て死を懲憑致升た、處利右衛門満面に微笑を
湛へ御身の心中果て然か吾又何をか思んサ一訣別の盃をしようとする
一杯を傾て妻女に指升たすると妻女は靜に其盃を受けて良人の顔を見上
げ涙を含て曰く、嗚呼郎君の決心はそうて有升たか妾誠に嬉しく思升、
今はの際に望み亦何をか恨み何をか歎ん、唯希は夫妻袂を相別の後と
雖比翼連理の昔を忘れず未來三世も互の夫婦ぞと懐ひ思れ忘れぞ忘れ
ぞし給ふ勿れと啼々として泣き宛轉として情堪ざる者の如く、利右衛
門も深く其情を察して相共に聲を吞て泣々茲に生別を成し遂に單身江
戸に出で、上杉家の非政を代官所に訴たが、一方は飛ぶ鳥も落す程の
威勢のある大諸侯一方は根は水呑百姓の訴訟であるから後難を恐て取
上て呉ない、て止む事を得ずその書類を公方家の定紋ある塗箱に入れ

上を幾重にも包て御老中に直訴に及た所が、遂に公沙汰と成り利右衛
門の訴訟はお取上に成て御領三萬石は再び元の幕府の直轄に戻たが、
さて利右衛門は領主を相手取た科で上杉家に引渡され自分の村外に於
て磔の刑に上たと云事である、其義民の碑が今現に残て居升が其磔に
上た時の利右衛門及び妻子眷屬の心中はどうてムませふ、娛れしいや
ら悲ひやら、ほんに悲ひやら娛しひやら
偕て利右衛門は一身を捨て、三萬石の領分を救け、御教祖は二人の子
を捨て數百石の財産を捨て猶五十年の歲月は人を救る爲に幾多の辛苦
艱難と戦ひ今日はと云は唯の一日もなかつたと云事て有升たが其が爲
に天下數百万の人が救り今より後又幾億万の人が救かるか計られんの
でム升、

是は御教祖や利右衛門のみには限らない、基督も世界人類の爲に十字架上に磔刑に處せられ、釋迦も王位を捨て、身を乞食に迄墮し孔子も七十餘國を遍歴して席を暖むるに暇なく日本の空海最澄其他の高祖方は皆身を捨て社會人類の爲に犠牲に供たのである、であるから我々布教師は財産を捨て生命を捨て、進まん事には到底其目的を達する事が出来ないのである、サー皆さん死で下され死ぬる積で進で下され戰場に臨で彈丸を怖て松樹の陰に逃げ隠れする者は却て撃死するのである、三寸底は地獄否大海である、然に船の上で死ぬる者は少なうて疊の上で死ぬる者がなぜ多ひので有か、死生命あり富貴天にあり生きようとて生きたれず死のうとして死なれず持たうとして財産は保てず、身引身勝手は到底駄目である、御筆先の中に、今日の日はよこめふるま

い、ゆだんなし、なんときどんなことがあるやら

一人の心を修めよ

我身だに、我まゝならぬ世の中に、人の背くは咎ならばこそ、
内村鑑藏氏云はるゝには、馬族の眼より人間を見れば、其成處悉く皆馬鹿げた事に思であらふ、亞弗利加の野蠻人の眼に映る、ピスマークだのグランドストーン、だのと云ふ豪傑は偏僻怪異實に不思議なる動物である、と嘲けるので有ふ人間は獸類と全く同類同族の跡を逐者である、
开は俗人は俗人を求め聖人は聖人と相齒する所謂牛は牛違と云様な者で有から、馬族より賞讃を受けんと欲せば宜く馬の如にせねば成らぬ馬の如に歩るき馬の如に飲み馬の如に使役せられ、馬の如にびんく

跳廻たならば馬族は大に喜びて人間を尊崇するて有ふ、然ども吾人に
して人類たるの威嚴を固く守り苟も人類たるの本領に恃らぬ様に努め
んか馬族は一齊擧て吾人を罵り吾人を惡馬視し、吾人を彼等の仲間よ
り放逐する事は理の最も觀易き事であらふと、云れ升たが、實に社會
人情の缺點を描來て其神髓に徹するの明言であらふかと思ふ、社會の
人情は曾て御教祖の御誠成され、ほしひ、をしひ、則身引身勝手を票
準として自分の爲に利益ある者は、假令社會に害を流す大惡人でも、
豪ひ者じや、善人じやと云て、喧く褒立るが、又身命財産を擧て社會
に貢獻し、其一舉一動が悉く社會の龜鑑となる程の大善人、大豪傑で
も自分の爲に、不利なる時は、直に偽善者と罵詈し好物と誹謗して止
ぬ者が百人の中に九十九人半迄有と云様なる次第である

隣に餅搗杵の音、渠は世帯知らずで有食ひ倒れである、餅搗米が有ば
何ぞ源兵衛さんの所へ借金を返濟せんのである乎、とれ源兵衛親爺を
督促に追掛て遣らんと、お腰がぼつ／＼上り掛た處へ、舅さん此は輕
少で御座ひ升が、梅ちゃんに上げて下さいと差出重箱の中に餅の數が
七も有れば、俄に變る主人の相好はく／＼と笑を湛へて、ナ一嫁々腐
ても鯛じやわい隣の吉公底男は、元は何でも田舎の豪農で有た相なが
墜落て居てもとこやらに品がある自分が食はいでも人には遣たがる、
なあ男の中花じやわい、と最前の劍幕はどこへやら、何と水臭事では
御さひませんが、此等の譬喩は餘に野卑では御さひ升が如何にせん者
に上下尊卑の差別は有も、其皮を剥て骨を露さは殆ど皆こんな醜體で
御座ひ升、宴會の席に平松さん御免加古川さん御免頂き升て差上る

筈ですが失禮なんて、盃が廻ると臈吉先生肩を擧め、平松の野郎
最前より待て居に己に一寸も盃を出さぬ、何の意趣が有か知らんが、
近頃は少し自己を輕蔑して居やがると怒氣勃々たる折柄、平松の方で
は何の氣もなく、本より日頃昵近の間柄態と後廻しにして居る者か思
ひ出したる様に、ヤ一臈吉君一杯献上と差出を臈吉は横に向咳拂の二
三度もしてあり誰にかと思たら、私にですか私なんか、盃は御無用
に成されませ、私は近頃禁酒だとすねる、一座の者は怪嫌顔平松は手
持無沙汰何と苦々敷限では御さいません乎、炊事擔當人の嫁女が御膳
の支度をして舅姑に案内をしてと思て居處へ良人が出て来るを見て何
氣なくサー御晝飯が出来升た何卒御あがり遊せ、次に奥へ行て舅姑の
前に手をつかへ、御膳が大層遅刻致升た、何も出来て居ませんが、と

うぞ召上りて下されと、姑は最前より嫁が御膳の支度にひまどりのたの
と、案内をするに良人を先にし我を後にしたるを腹立敷思て居際とて
、いゝや未だ早ふ御座り升、晝飯と云者は正午を過ねば飯べる者で御
座ひません、まあ〜若御夫婦がお先にと、臈る、何と嫁に成ものは
随分心配な者で御さいません乎、母の病氣に娘と嫁が介抱をする、母は
娘に早く藥を煎じて呉ぬか何をさしても愚頭〜と埒が明ぬと、する
と娘は聲荒らげ、そら又雷が落ちて來た善ひ加減に死で仕舞へば却て埒
が明くのと無法の返答去れと母は莞爾として笑て居る、嫁は優さし
く御母さん御氣分は如何で御座り升、苦ても藥は御辛抱して召上ませ
ソップは如何牛乳を暖めませふかちと擦りませふかと、有らん限の親
切を盡し升るけれ共姑は面脹らして、へーへー毎度御親切に有難御座

い升と濟した者で御ざり升

去れば迎姑ばかり惡ひのでは御座ひません身引身勝手を標準として偏頗の酷さを嫌た御話で御座り升、元來姑と嫁の間の惡きは一方許を咎む可き者ではない、双方共に譯がわからぬからである、比較して云は嫁の方が惡ひので御座ひ升、貝原先生の女大學に、女子は我家に在ては我父母に専ら孝を行ふ理なり、去れ共良人の家に行ては専ら嬖を我親よりも重じて厚く愛み敬ひ孝行を盡すべし、親の方を重じ嬖めの方を輕すること勿れ舅姑の方朝夕の見舞を闕くべからず舅姑の方の勤むべき業を忘るべからず、若舅姑の命あらば慎み行て背くべからず、萬の事舅姑に問て其教に任すべし、舅姑若し我を憎誹給ふ共怒恨る事なかれ孝を盡して誠を以て行れば後には必ず中よく成物なりと御座り升

る通何處迄も嫁の方より伏從せねば成らんの有升

婦人は良人の家を我家と致升るから、唐土には嫁入するを歸ると云相に御ざり升、我家に歸ると云事有れば若良人及舅姑が自分の氣に入らねば迎去て歸る家は無ひので御ざり升、御教祖は袖の振合も多生の縁況や夫婦と成は生れ變り死易りする間に救られたり救たりして、是非に一代苦樂を共にし生死を俱にせねば成らぬ因縁ある者を、神様が繋合して下さつたので有と仰せらる、て有から縦ひ良人の家貧賤なり共良人を怨み謗りては成らん、自分が蒔た種がはいたので有、注文通天より授りたのであると覺悟して何處迄も良人に對しては顔色言葉遣慇懃に謙りて奢て無禮な事は出来ません、其良人の親たる舅姑であるから自分の親の如に敬はねば成るのである、其眞實敬ひの心が乏き所

から舅姑と嫁との間が悪くなる、すると嫁の親は其舅姑の根性悪を怨恨むので御ざり升が、却て自分の膝下に在りし時に其教育が宜布無た事に気が附かんである娘を持たる親御衆は成丈其娘の時代に教育をして貰ひ度者である、古の學者は皆誠て有升、女常に心遣して、其身を堅く慎み守るべし、朝は早く起さ夜は遅く寢晝は寢ずして家の内の事に心を用ひ織縫績緝ことを怠りては成らん、茶酒杯多く吞は見苦き者である、歌俳諧に凝るも餘り結好なる事ではない、明治の傑僧行誠上人の許に某婦人かさも自慢そうに自作の歌を出して添削を求じに、上人は直に筆を取て其端冊の裏に、さらりと書て與へしは、歌をよむ女房などは、いらぬもの、良人をしりに敷島の道、婦人は非常に赤面をして後には歌を廢した相に御ざい升、何も歌を讀むのが悪ひと云

のではないが良人の事や一家の事を忘れては成らぬからで御座ひ升、又大阪地方の婦人は歌舞妓小歌淨瑠璃杯の淫れが間敷に執心致升が、是が抑も良人に不貞操一家を攪亂するの原因で御座ひ升、將來改良したる演劇は兎も角今日の如き淨瑠璃や芝居は人心を腐敗するの鴆毒女房を淫亂に導くの器械で御座ひ升、淨瑠璃芝居小歌杯に浮身をやつす婦人は凡て不貞操者淫亂者と斷定しても毫も遠慮は御ざい升まい若き時は良人の親類友達下部等の若き男に打解て物語をするは誠に見苦しき者で御座ひ升、又罪惡の基ひで御ざい升身の莊りも衣裳の染色模様連も餘り目立ぬ方が宜布御ざい升
我郷の親の方に厚くして良人の方の親類を次にする人が有升、持參金の有嫁杯は特に此風がある、持參金の光は却て之が爲に消滅するの

氣が附ぬか、五節句杯も先良人の方に勤て次に我親に及ぶのが順序である、凡て良人の許なきに私に人に物を饋ると云は道ならぬ事で御座ひ升、下女下男を遣にも心を用ひねば成らぬ、下女が過て茶碗を破る奥さんは大聲を擧てソー滅多無性に何も彼も破られては内の身代が續やしない、すると亭主は聲和げお前の様に事を大業に云ては体裁が悪ひ、婦人は凡て物和に事を取成可き者である、お前も知ての通り乃公此間東京へ遊びに行たが歸途には東海道原の宿に泊り朝方店の椽に打掛草靴をはきもて不圖見上れば富士は皎然として高く半空に峙へ雲は山の半腹を廻り雪は遙に雲の上に見へて、得も云れぬ景色なりければ思す名山である、大きな山であると稱讚せしに、旅宿の下婢は言葉靜に、なんて甚麼に御ほめ遊す、富士はああ大きく見へ升ても半分は雪

で御ざい升と云た、乃公も之には感心をして今に忘れ兼て居がお前も此から物を大業に言はぬ方が宜しからふと云と、妻君はふうんと鼻で返辭を成し、亦けらくと嘲笑ひ甚麼に其下婢が御氣に召さば迎て權妻にでも成されば宜ひ、妾又不敏なりと雖其位な眞似は出來升ると云て居所へ、昵近の間柄なる某が訪ね來り、是は是は意外に御無沙汰に打過升たが過日來は東京御見物の爲め數十日の旅住居、大分お腴成さつたで有ふと思の外、大層肥滿て居らして大慶に存升ると挨拶すると女房は此處ぞと思ひ、御挨拶に預り痛入升亭主はア肥て見へ升ても半分は垢で御座ひ升と云た相に御座ひ升、何と無作法な事で有ません乎、兎も角も物和かなるは女の徳で御座り升から、亂暴なる言葉は大の禁物とせねば成らぬ

亦下女下男の心様悪くして云甲斐なき者は教へ諭すべし、何處迄も奸惡にして追從輕薄にして舅姑姨などの事を猥に讒り聞せる時は婦人は大概智惠なくして是を信じ爲に大切なる舅姑姨の親みを薄くするから成る可く早く追出すべく斯る者を親み近る時は親類の中を defence 一家を亂すの基ひである何れにしても一家の亂は嫁より起り其源は實の父母の教育の仕様に基くので有から、貝原先生の女大學でも能く讀ますのが肝要で御座ひ升

御教祖は吾々信者が朝夕の御勤に唱る辭を示て、ちよいと、はなし神の言事、聞てくれ、惡きなことは言はんでな、此世の地と天とをかたどりて夫婦をこしらへ來るでな、是は此世の初めだし、と恰も放蕩息子に親が手を合して意見をする様に、長く執拗き事は言はんでな、亦

汝等の身の爲に惡き事は言はんでな、畢竟汝等が病氣幼折災難に罹て苦むを救助で遣たひからの事、此世は月日二神が伊弉諾尊伊弉册尊の夫婦の間に數億萬の男女を御産下されたのである、此則世の元は月日二柱の神様、人の始は諸神二柱の神様、一家の元は夫婦二人である、此より有難者は世の中に無いので有

易に天地有て然後に萬物あり、萬物ありて然後に男女あり、男女ありて然後に父子あり、父子ありて然後に君臣あり、君臣有て然後に上下あり、上下有て然後に禮義錯る所あり、夫婦の道以て久しからずんば有可らず

偕て思はず話に凝て御話が婦人又は夫婦の方ばかりに傾て來升たが、要するに身引身勝手を標準としては、人間としての本領に戻るのである

亦斯る御話は世界并の人が聞と大に嘲笑するで有ませふ、弱肉強食優勝劣敗の世の中に、甚麼な迂濶な事を言て居ては間に合ふ者かと、恰も馬族が人間を嘲笑のと同様で御座ひませふ、去れば迎吾人は人間の本領を明にし威嚴を守らねば成ません、其が爲に馬族に笑れたれば迎別に耻辱でも有まひから、吾人は百尺竿頭更に一步を進て大に論せねば成ませんが餘り長座に成升から次席に譲りませふ

天理より觀たる賭博藝娼妓夫婦の禮儀蓄妾等の利害を論ず

前席に於ても御話申升た通り、馬族の眼より人間の成す所を見と、悉く皆馬鹿氣て居から人間を氣狂と成し痴漢と成し或は惡馬と匈匈であらふ、故に馬族社會の稱讚を博せんとすれば、馬の如に飲み、馬の如

に食ひ馬の如に跳廻ねば成まい、併し如何に稱讚られるのが宜しければ迎人間の領を失て身を禽獸に墮すと云も實に又奇態な事有、茲に吾人天理教信者は如何に馬族たる世界次に誘られても、夫婦喧嘩は仕度ない成べく親子睦くして見度ひ、可成兄妹間善くして見たい、可成妾狂は仕度ない、可成間男は仕度ない、可成法外な欲は止に仕度ひ可成虚偽は言度ない、否仕度ない止めに仕度ひ位は何人も思所、而て其實行が六ヶ敷ひのである、所謂三歳の童子も猶能く知所、而て八十の翁も猶能く行う事能はずとは此等の事で御さいませふ、其を稍實行して居升のは猶我御道の信者のみと云も過言では御座ひ升まい、何せと云に世界次の人の格別罪と思はぬ事でも御道の人は大罪として恐れ慎むからで御さい升、既に寡かなる事にも慎み深ければ大なる罪惡は

論外で有ませふ、其證據の一二を擧げれば世上の人は彼の賭博を左程罪とは思て居升まい、勝負を天に任せて合意の上で勝負を争ので有から決て罪には成らぬ、國家が法律に於て禁じて有のは國家經濟の紊亂を恐るが故なり、故に之を犯すも法律上の罪人となるも道德上の罪には成ずと云て居者が澤山御座ひ升すると、又或人は假令法律上の罪にせよ、國法を犯すは矢張法律と道德と共に犯せる者なりと、併しなから吾御道にはそんな迂遠な理窟を以て之を罪とするのでは御さいません、元來法律なんかと云者は盜人を捉て後に緋、火の手が上て後に消防夫と云様な者で其功力と云者は誠に薄弱な者である、故に今日の人にして賭博の味を知らぬ者は殆ど有升まい巧に法網を潜る惡運の強き奴が八分九分九厘迄を占めて居から、社會の表面は至極靜謐で有が

其裏面より觀時は鬪犬鬪鷄碁將碁双六花骨牌其他種々の器械方法を以て無暗に賭博を遣て居事は、諸君が先刻御承知であらふと思升、斯く公然の秘密と成て社會が格別罪と思て居なひ賭博を不思議にも御道の人は毒虫の如に忌嫌のである、大蛇は見共賭博は見たと云て居升、大蛇の爲には五尺の身體を害せらるゝ已耳、賭博は人の精神即ち靈魂を腐蝕するから其禍ひ、一家親族朋友に及び、且つ自身の死逝き生れ變る其永遠の未來を過るからで御さい升、殊に又之を根本的に罪惡であるとして非認する譯は、世界の人類は皆大神様の愛子である同じ親様の子であるから一列は皆兄妹である、既に兄妹で有以上は緩急相援苦樂を共にするのが道である、然に賭博は之に反して俗に云ふ麥飯で鯉を釣る、實に壹圓の元で拾圓の金を欺き取るのである平生は兄弟も畜なら

んと云親き間柄でも、いざ賭博とならば恐き者で御ざい升、優勝劣敗
弱肉強食と云語は此場合に用る適切な金言である、其でも兄弟と云へ
ませふか、斯云譯合から御道の人は賭博を致しません、若し百人の中に
一人も有は宜敷く脱講を命ずべし某先生は賭博を爲す者は犬で有ると
云升た、渠は常に間善くして遊で居升が一片の魚の骨を投て遣と云と
今迄の親みは忽に忘れて仕舞で爪を研ぎ、牙をむきて噛合ふ有様は實に
物凄ひ様で有、下等社會は露骨に犬の眞似を爲し上等社會は巧に外面
を裝て内心に魚の骨を争て居ので有と罵倒致され升た、實に愉快で有
ませんか

次に青樓に上て藝妓對手に散財を致しません、茶屋の二階に泥酔する
者に夫婦兄弟と共にする者は有升まい、御道の人は歡樂も憂惱も家族

と共にすると云精神より登樓は致しません、殊に神様より授たる金錢
を無益に費消するを罪惡として慙るので御座い升、
既に藝妓を招て散財すらせぬ者が、娼妓を愛する筈がない、假令獨身
者でも娼妓は買んので有、世間普通より頑固と笑は笑へ、御道は斷じ
て擯斥するので御ざい升、何者正當に婚姻の式を擧て夫婦と成より外
の者を愛するは凡て姦姪罪に問ふので御ざい升
次に妾を蓄ぬ事で御ざい升、御教祖は二人の心をおさめよ、なにかの
こともあらわれると、仰せられ升たが、畢竟妾を蓄くと云のは二人の
心がおさまらんからである、二人の心が修らんと云のは、良人は妻を
愛せず、妻は良人を敬はんからである、八埃の中で、ほしひと云は女
房が間夫を拵へ亭主が妾を置く義にも當る、皆是身を滅し一家を混亂

するの基ひである、昔時からも恪氣嫉妬は婦人第一の慎なりと有て婦人の恪氣程世に見苦き者は無れ共、去ば迎夫たる者婦人の心優く恪氣せざるに附込で妾狂をするは愛の何たるを知らぬ、人倫の大道を知らぬ罪人である、全体人は何の爲に世に生て來た者で有か色欲を貪らんと爲て有か然ば寧畜生に生た方が宜しからふ、畜生は時と場所をも構はずに情の動くに隨て姪を行ふ者で有からで御さい升、去ど人として畜生の仲間人も少々變な者で御さい升、元來夫婦の道を正くするのは天地和合の義に順するのである、若し定れる夫婦の外の男女と姪事をするは勿論其定れる、夫婦の間にも閨門の中纒に其道に背く時は直に天地の道に背くと云ふ、天に日月星晨有て、地に山川草木がある、其天に天象有、地に地理有て地理は必天象に應ずる者で有升から、男女の合

會も定れる所あり、(深く注意)然を戲半分に其定れる所を變更して徒に姪事を貪るは明に天理に戻り神様の御叱責を受るので御さひ升、天地の間には春夏秋冬の四時の規則が定て居升るから、男女の合會も一定の時が有て白晝閨門に入様な事は本より無い事有て、殊に月經の有時亦是病中病後産前産後は無論雷電風雨劇き時杯は最も慎ねば成らるので御さい升、天地の間には東西南北の位置の定りが有からして男女の合會も一定の房室の有べき筈で御さい升、神前臺所と所構ぬ所業は天理に背くので御さい升、田舎の放蕩息子と莫連女が倉庫の中軒下簀の中杯に野合する者あるは、是等は生ながら畜生道に轉籍をして居ので御座ひ升、天地の間に日月五星二十八宿と自ら數の定りが有升から男女の合會も度數に制限が有升、度數を超過する時は多病幼折の基ひ

以て有て、亦天理に背くので御ざい升
 偕て此の規則を守り閨門の内正ければ十柱の神様は無論八百萬の神様
 も其一家を守護して下さるので御ざい升、故に家に在ては家齊ひ國に
 在ては天下が治るので御ざい升、若又是に背く時は神様は不義淫亂の
 家を嫌ひ升から、御守護は薄く成升るし家の禮儀が亂て來て一家衰滅
 の元となり、國に在ては政治が亂て天下危亡の兆となる、實に恐るべ
 き者で御ざい升、是も馬族たる世界次の人より見時は夫婦の間の私事
 で有て些細な事の様に思ても居ませふが、神様は地と天とをかたどり
 て夫婦をこしらへ來るてなと、御ざい升から、男子は天の徳を全ふし
 て居もの、婦人は地の徳を全ふして居もので有から、身は五尺の身体
 で有ても其徳は天地に充滿して居から、閨門の事大小となく悉く天地

に反響する相に御ざい升

昔時支那の哀公と云王様が孔子様に御尋成るのは人間の道何を以て大
 切な者とするかと、孔子の御答には、君の斯く云て下さるのは實に人
 民の幸福で御ざい升、古の政は人を愛するのを大切と致升た、人を愛
 する所以は禮を大切なりと致升、禮は敬を大切なりと致升、敬は夫婦
 の道を大切なりと致升、天地合ざれば萬物生ぜず、夫婦の道は萬物の
 原因で御ざい升、云はれた相に御ざい升世界次と云ても有道の人はち
 がうた者で御ざい升
 偕て又良人亂暴にして妾狂をすれば迎、妻たる者は何處迄も謹慎をし
 て恪氣嫉妬は出來ません斯る良人と繋ぎ合されたるは全く因縁で有と
 諦て女の盡すべき道を踏で行ねば成ません、皆様も御承知でも御ざい

ませふが、御教祖が御若年の時（神様なき以前）中山家に一人の下婢が有升て名は加乃と申升、良人善兵衛様は正直律義の御方で有升たが若氣の過にて不圖加乃女に手が懸て非常に寵愛を致され升、其が爲に別に御教祖を疎む様な事は無いとは言もの、婦人の特性として否人情の通性として決して愉快な者ではない、然に御教祖は毛頭恪氣は成らな、管に恪氣せぬばかりでない、加乃を益々可愛がりて奈良長谷多武峯吉野杯と良人が物見遊散に行時は自ら甲斐々敷辨當を認め亦御自分の新しき美服を出て加乃に着て良人に隨行をさせ升る、そして御自身は留守番である、然に加乃は元來好悪なる性質で有から御教祖の恩を恩とせず還て毒殺をして己れ代て本妻に成度と云要意を起升て、一日味噌汁の中に毒を入れて御教祖に獎升た所神ならぬ身の本より知由もな

く、好な味噌汁を能も炊で呉たりと喜びもて召上られ升たが、毒が廻るに隨て吐やら降すやら四苦八苦の御苦惱で有たが、神佛も罪なき人を殺すに忍び給ぬ者か遂に蘇生成され升たが此所爲が明に加乃の所業で有と云事が分り升たけれ共毫も加乃を御怨恨は成さりません、管に恨まんばかりではない益々不憫に思召て顔色を和げ言葉を優さしくして機織術や裁縫の業杯を教て恰も實の妹の如に愛憐を加へられ升たが斯る毒婦も御教祖の御高德に感化せられて三年の後大に慚愧後悔して中山家を辭して歸り升た相にム升、皆様此御話を聞て奈何云感覺が起升か御教祖の性質も嫉妬深さ加乃女の様で有升たならば、或は加乃女の毒手に懸て死し加乃も共に埋葬せらるゝか到底無事に納りが着かなかつたで有ふと思れ升、一列兄妹と云御慈悲が有たればこそ二人共に

生命を救かりて加之も其事が千載の美談として斯く御話の材料にも成るのでム升

昔時大内左京大夫義隆と云て周防の國主が有升た、其奥方は萬里小路内大臣秀房卿の娘で有て貞子と申升、曾て義隆用を帶て京師に上り長らく國に還りませんから、貞子も日夜都の空を眺て寂莫さに堪へ兼て居升、所が茲に又義隆が深く愛して居る女房某と云が有升、貞子が良人義隆不在の爲に其女房も定て寂しからんと察て小袖拵造り文を添て其寂寥を慰め、其文の終に一首の歌が有

身をつみて、人のいたさぞ知られける、戀しかりけり、こひしかるらん

即自分も良人の還の餘り遅き故寂しさを感じては居が自分は侍女杯が

澤山追從して茶よ花よと無聊を慰て呉るから幾分か辛抱もしよいが、御許は蔭の身で有から其寂さも又一入ならんとの心で有升る者か、女房は其寛容なる心に感激し、其後は屢々其奥方の許を訪て恭く侍じく所から、奥方は亦益々渠を愛し勞り升る、女房も後には其愛に堪へ難く成たる者か潜然として涙を垂れて云のには妾は身卑して禮義に習はず不圖殿の恩愛に溺て誠に道ならぬ事を致升た、今は幸に夢も覺め升たから例や殿の御歸國有て再び心を懸け給共妾は重て殿の心に從ひ升まい、斯る情深き奥方の爲に身の冥伽や盡き果てん、其よりは尼に成て身の罪を懺悔致したうム升と眞情胸に逼て夜涙眞珠の如し双々明月より墮つとでも云度程で有、之を聞たる貞子争て之を聞入べき決してさる心遣は無要である、若し然らん時は妾の罪の却て多からんと漸く慰

論して之を留たと云の美談もム升、日夜嫉妬猜忌の火を燃して居る御婦人達はちと、此等の御話を藥に煎じて吞で貰ひ度者でム升、偕て右の様な御話を幾ら致升ても世間の人は中々傾聴ては呉ません、賭博を罪とせず藝娼妓に浮れるを罪とせず姦夫を罪とせず妾狂を罪と致しませんから、定て天理教の寢言として嘲笑するてムませふ、其は又其筈です、人天の大導師日本宗教の大王たる本願寺法主にですら手掛足掛の騒動さへ有今日此頃に況て末派寺院の非法亂行は云も更殊に肉食妻帯嚴禁の諸宗の御房様も、何も辨慶の眞似をするのでも有まいが房頭頭を袈袋にて捲き京阪地方街燈影暗き邊白鬼赤鬼の濟渡を成もの随分多く、田舎に在ては下等社會の有夫の妻又は石塔の赤ひ信女を欺て引導を渡し、運動費には信者より捲上たる御布施を濫用すると云の

不仕末で有から到底房様杯の手を以て今日社會の風紀を矯正事は木に依て魚を需るより難からふと思ひ升、斯る房様が先達と成て其他の木葉連が一齊射撃我御道を打斃そうとするのでム升、故に私は渠等を目して馬族と云のでム升、馬族と人間とは世界何れの處に参り升ても性格は合しません合はねば迎別に、愧にも成升まいから可成右の御話通り實行して、神様の御靈救に預り度者でム升

講社の摸範天野氏の眞實を陳べて併て夫婦親子等の繋ぎ合の理を論ず

大阪府堺市柳之町に天野榮二郎と云ふ御道の信者が御座ひ升、家は格別富むには有ねど又貧しからぬ内で有て、家内は誠に睦く生計して居

升親は慈を以て教え子は孝を以て行へ、夫婦は和順にして睦く兄弟は友愛にして親く、奉公人は從順にして能く働き世間の交際は眞實にして麗く、大神様に對しては敬慕の情燃るが如くに熾盛である、殊に家業に暇あれば出でて未信者に對して、にほひがけを成し教理を説く事例時も其人の肺肝より潑しり出るが故に無病の人も其熱誠に感動して講社に加入する者が間間ある僧に御さい升、若又病人ある事を聞ば行程の遠近を問はず家業を捨てて早々趨りて其家に行き、醫師坊頭其他反對家の群集し居も毫も意に懸けず背戸の井土端に赤裸體に成て頭上より水を被る事其幾十幾百杯なるか、數の如きは元より算うる餘裕の有らばこそ、一心不亂に大神様に祈誓するは、罪深き榮二郎の如き者尊靈の御名を聞かして戴くさる有難に今は死に瀕せる病人に對して御神

徳を談じ教理の取次を成し渠が沈没せんとしつゝある死の淵より救ひ上らるゝの好機會に接したるは何等過分の幸福ぞ、尊靈の御恩惠の深き厚き事は生涯忘は致しません、不肖なる身を以て御靈救の御話をしては却て御神徳を贖し御道の名を汚辱するの責は免れざるも、今や病人某は血肉の父母兄妹に分れ最愛の妻子を措て哀れ三十歳を一期として哀れ將來有望の身を以て難患不治の肺病の手に捕へられ、死の獄門に入らんとするの一刹那身の分齋を顧るの暇は有まません、其罪は本より甘じて受升る、備て又肺病は殊更罪の深き者と聞く、今渠が懺悔改心をすればとて薄弱なる信仰罪には兎ても勝て間敷去ればとて見殺には出来ません、依て數ならぬ私の生命を五年ばかり減じ升、其て足らずは私の生命を差上升假令唯今御迎取に成る共人の爲め道の爲には兼て

覺悟は致して居升、どうぞ私の赤誠を御照覽遊されて某を御救助下されませと紅涙滂沱として瀧の如く、哀慟の情悲哀の聲見る人身慄して感ぜざるはなく、御筆先にもいかほどに六間敷な病でも是れなほらんといふでないぞや、と示されたる通り九死一生の病人も風の雲を拂ふて満月の現るゝ如くに忽に功驗あることが屢々有僧に御ざい升此の行爲が御さづけ持とか教導職とか各教會の重役の方々の成す所ならばまだしも、漸く今より二ヶ月程以前に身に御障もなんにもなき健康の身を以て唯教理に感じて、堺支教會所の講社と成たる人で有て教職も無ければ御さづけもなき人の行爲としては、苟にも教會周旋の末席を汚す我々布教師たる者誠に身に冷汗を流して慚愧せねば成らぬ事で御ざい升、御教祖が塵埃の中に金が有と仰せられたのは此等の事を

御示に成た者で有升まい歟

是と全く感すべきは全人の妻エイで御ざい升、世の諺にも窈窕たる淑女は篤實温厚なる君子の好迷にして過劇粗暴なる狂漢の配遇にあらずとやら、榮二郎子は本より學者大人にあらず妻女又才色兼備の貴嬪では有ません、去れど古語にも悍婦の精進結齋して念佛題目に凝よりは奴婢を打擲する鞭箠の數を減ぜよ、偽學者の名聞利欲に奔競するよりは、細民の廉耻を知るに如すと有通り、細民無學の天野氏も身を捨て人の生命を救けんとする者で有から、本より温良恭謙にして能く廉耻を知りて義を重じ慈悲ありて能く貧窮を憐むは云迄もなく、妻女に至ては性質伶俐にして徳高く貞操堅確して容貌又備り實に此人にして此妻あり何れが梅やら櫻やら眞に羨むべき好配遇で御ざい升、天野氏に嫁

てより二十有餘年雨の晨に月の夜に琴瑟睦く綢繆濃に艱難にも歡喜にも影となり陽となりて互立合助合の御教祖の遺訓の實踐躬行者は否御教祖の足跡の萬分の一位は確に履行が出来て居僧に御ざい升瓜の蔓には茄子はならぬ、神様は又因縁と因縁を緊合すとやら、天野氏には長男二十歳を頭として四人の兒共ありて、皆性質温順にして家業に働く者學校に通もの母の膝下に戯るゝ者皆揃て親に行て孝あり見に従て優さしく妹に向て情深く父母亦之に向て大聲を放て叱嘖したこともなし和風駿騷として終始一日の如くて御ざい升、去ればとて閑暇なる職業ではなく三百六十日目の廻る程多忙な内で有升、家には數人の雇人を措き、午前は四時より午後は十時迄寸分暇なき餅饅頭の製造家で御ざい升、茲に不思議なるは其召遣の雇人が他の商店の様に出替

の入替の云事なく三年が五年でも主人より暇を出すに有らねば歸らな
いと云一事で御ざい升

八埃の中に可愛と云ことがある、此は吾身を愛する如く人の身も愛せよ、吾兒を愛する如く人の兒を愛せよとの御教訓と承る、去れば天野氏夫婦は雇人を見事吾子の如く愛するから斯く其恩に懐くので有升ま
い歎

昔時支那に陶淵明と云君子ありて吾兒を膝下に置いて親子恩愛の情に引
されて可愛がり過ては還て懦弱になり成人の程も覺束なからんと態と
心を鬼にして其男の兒を遠く離れたる別莊に獨居さして山に薪を取り
川に水を汲み自炊き自ら食せしむる事と致升た、所が春夏秋と過去り
て今は冬の寒天に向ひ朔風習々として骨を刺すとても言ひ度き時に成

升たから、流石は親子の情として一人の給仕を送て朝夕炊事の手傳を致させ升、其給仕に持せて遣し書面の文意は、汝朝夕の炊事も無難儀なことで有ふ今此男を遣はして薪水の勞を助く併し此兒も亦人の子なり能く大事に遇ふて遣やと有升た、君子と云はるゝ程の人は大に見所がちがひ升、心せよ遣ふも人の思ひ兒ぞ、我おもひ兒に思ひくらべて某諸候が寒中に高樓より市中往來の人を眺て、雪の日やあれも人の子樽ひろひ、と詠る如何にも其人の奥深しひ所が見へて嬉しきことで御ざい升

御教祖様は、むごひ心を打忘れ、やさしき心に成てこひ、と仰せらる世の下女下男を牛馬の様に追ひ遣ふ人々は少こしく御注意に預度者で御ざり升

偕て斯様に夫婦親子兄妹雇人に至迄善き者が揃ふと云のは十柱の大神様の御恩養に依る事は申迄もなき事ながら、暫く特別に御話をする時は三柱目の國狹土尊様の御守護である、此神様は金銀縁談萬繋合の御守護をして下さるので有て親子と成り夫婦となり兄妹となり主従となるも皆此神様の御差圖を聞く、而して神様は善人と善人とを繋ぎ合せ悪人と悪人とを繋合す、之を譬るに障子の破目をつくには矢張白紙を用て木綿切は用ひ升まい、絹布の破れ目をつくには矢張其共ツギを用ひて木綿切でつく事は有ますまい、人間も其如く前世に於て善き行爲を爲したる者は其と全様なる果報ある者と共に夫婦親子と御繋ぎ下さるので有、悪人も其通り牛は牛連鬼の女房に何とやら、如何に幼少の時より近隣の源ちゃんや梅子ちゃん、裏の田甫に蒲英公や蓮花草を

摘み、學校の行戻り待つまたれつ交情濃して、ほんに優しさ人好み人と互に思ひ思れても其は唯其間の因縁で有て夫婦と成れない人が澤山あるので御ざい升、假令又幾百里を隔て、夢にも逢たこと見たことのない人でも因縁あれば繋合して下され升、人或は疑念を起して若し全じ果報の有者が夫婦となるとすれば夫が病めば妻も病み僧な者じやに其事なきは如何と、然り其疑念の如く夫婦共に病むのである、元來頭痛がする腹痛がすると云も畢竟精神一が其痛苦を感じるのである、去れば一身同體の夫婦として其一人が病めば其人の苦痛は云迄もなければ共是が爲に残る一人が如何に不愉快を覺ゆるで有ませふ、月を觀ても花を見ても涙の種飲食又美味を知らないのである、下ひては居が俗謳にひやかしゃ、をよしよ夜露が毒じや、主が風引や共なんぎ、と云こ

とがある、又十五夜は座頭の妻の啼夜哉と云者がある此邊御熟考に預り度者で御ざい升、で御教祖は一人の煩は一家の煩であらふがなと仰せられ升た、故に中産以下の者で良人でも妻女でも長病する時は多くは其一家は潰れて仕舞もので御ざり升、であるから一家の中に一人の病有時は家内全体の罪の報なりと覺悟して共に大神様に懺悔して共に祈禱を捧げなくては其病人が救かり惡ひので御ざり升然に世は様々な者で良人は眼病を愈さん爲に生駒山の聖天大啼の不動さんに願を籠て一週間の斷食して滔々たる瀧の水を被て祈誓を凝らし居るのに、妻は内に在て酒に酔ひ芝居に耽り、さては不義密通の不淨行、悴は當世風の生意氣に、ヘン醫師の手離に成たる者が何の神佛に依て平愈する者か、またあの腐敗眼を治して身代を自由に仕度ひと云

ので有歟免てもそんな了見では御利益が有ものかと日遊廓さして日
 參を致され升、成程此では息子の云通り家内の氣が別々であるから救
 かる道理が有ません
 是に付て有難實歴談が有升から御聽取下され、直天野氏の南隣に金田
 卯三郎と云人が有升
 父は治郎吉と云て曾て堺縣廳より親孝行の御褒美金の下た程の正直律
 義な人で御座り升

堺錦之町濱手操屋治平悴治郎吉

其方儀兩親并に祖母へ事方宜敷晝夜職業出精家内睦敷相暮候段奇特
 の事に候仍て爲御褒美金貳百匹扇子一對被下候事

辛未三月

堺縣廳

とした書物が同家の軸物と成て床の間に掛て居升、此治郎吉と云人は
 本年五十七才其妻ムメと云は五十四才に成升が、夫婦と成りて三十四
 年の今日に至る長日月の間未曾て一言の争もないと云ことと有升から
 家庭の一斑は其邊で御推量を希ふて置升て、直に卯三郎子の病氣平癒
 の事に及び升

借て卯三郎子は本年三十才に成升が昨年十二月の頃より心臓病に罹り
 遂に重症に陥入て一時は人事不省となり、醫師も危篤と認て施すべき
 術を知らず、一家は唯歎息の涙にくるゝのみ、詮方盡て同市綾之町の
 堺支教會所に請て禁厭を求め升た、處本より否む筈もなく同情の涙止
 め敢へず、早速該宅に到り懇に教理を説き今の因縁の理より一人の病
 は一家の煩ひと云ことを説れた處、本人は勿論家内中皆其意を體して

一身同體となりて一心に大神様に御継り申た、殊に感すべきは本年二十五才になる妻女さくで御ざり升、比翼連理偕老同穴の契を結たる妻女さくで御ざり升、さく女が熟ら思ひ升るは一樹の蔭に宿り一河の流を汲も他生の縁にこと聞く者を況や良人となり妻となる身の如何で深き契のなからざらんや、今や吾良人は花の蕾を一期として冥途に趣かん乎妾何の娛樂ありてか後に永存べき、去れば逆徒に死すべきに非ず如ず身を良人の身がはりに立て、せめては三年なり共壽命を保たせ度者と夜更人の寢静まる時を窺ひて氷を碎て數十杯の水をさぶくと全身に濺ぎて大神様に哀訴歎願致升る事一七日に及ぶ、御神樂歌になんでもなんぎはさゝぬぞゑたすけいちよのこのところと、御ざり升るが、神様の御言葉に虚偽は有ません、さしもの大患も僅に一週間にし

て全快致升て今は一家揃て無二の信者と成升て家庭の和睦は以前にも増して驟然たる者で御ざり升

是に依て考るも善因縁と善因縁とを繋ぎ悪因縁と悪因縁とを繋ぐと云事が判明し、且つ一人の病は一家の煩で有から一家揃て信心をせぬ事には御利益が遅ひと云ことも御譯りに成たて御ざりませふ「因縁と云に語弊あれど今は暫く通用語を用ふ」

終に臨んで天野氏の御本部詣の所感を述べて壇を下りませふ、本年五月十三日天野氏は初試験の爲に御本部へ參詣致升て例日の朝の勤行に參拜致升た處、雲の如に集ひ來る信者の中に年頃十七八より二十二三の凡そ三十人ばかり一團が靜々と神前に額つきて祈念を凝らすは其戴て來りし帽子に依りて天理教校の生徒で有と云ことが知升た、此時天野

氏の心頭に一種の感慨が起る其は他の中學生杯は多く生意氣にして素行修らす父兄を欺ては金錢を貪り其金は皆遊興費に消へて仕舞のである、所が教校生徒の父兄は長年間社會の貧賤の者や孤獨や死に瀕せる病人を救ひ天理の大道を世に普及せん爲に、世間の罵詈譎謗批難抗擊は雨の如に身邊に降り濺ぐをも物共せず、危難と戦ひ困嶮と戦ひ讒誣中傷嫉妬怨恨あらゆる浮世の虐遇酷待と戦ひ身に幾十箇所の瘡痕を受け家財に多大の穴を明け所謂御教祖の山坂や、ひばらぐろも、がけみちも、つるぎのなかも、とうりぬけたら、と御諭し下されたる通り其危険極る崖路や劔の中の憂き苦勞の最中より一ヶ年百圓内外の金を投じて子弟を入校させたる父兄も有ならん、まだみへる、火の中もあり、ふちなかも、それをこしたたら、ほそみち、と仰せられ升たが、實

に火の燃るが如く盛大なる教會となり飛鳥も落る程の勢力が頑固なる周旋杯の爲に頓に衰微を來たして深き淵の底に墮落して亦漸に浮上て細々と炊煙を上兼て居る會長の子弟も有ならん細道をだん／＼こせば大みちや、これがたしかな本道である、と諭されたる通り數十年の艱苦を嘗盡して遂には數百の部下が團結して船塲又は河原町の如き宏壯華麗なる教會を建築して其勢力旭の昇るが如き教會の重役方の子弟もあるならん何れにしても眞實の心眞實の金錢を以て薰陶せらる、青年であるから斯る殊勝なる行爲が現れるのであらふか、去れば世間普通の學校生徒の放蕩なるは其父兄が不正不義の金錢を以て學資とするからであらふか杯と左思右考して居升た處其多生徒の中に一人年の頃十七八の青年

が何となく際立て殊勝らしく兩眼には玉の如き露を含て哭かんばかりに何か頻に祈禱を凝して居升る、天野氏は不審に思ひ何人も大神の御前又は教祖様の御墓に詣て涙なき者は稀なるも廿歳前後の青年其も毎朝毎晩参拜する者の斯る信仰心の厚き者は類の尠き事であらふ、去れば何か他に子細の有へし不幸災難にも罹り居ならば共に御願を懸け金錢上の事ならば及ぶ限の微力を盡さん者と考て、數十人の前を通り過ぎ親く本人に接して失禮ながら何事を祈願して居らるゝや御構ひなくば御聞せ下されと申入升た處、青年は莞爾として笑ひ端然として容儀を正し、私は今は生徒の身にて布教の餘裕が有ませんから別に念頭に懸る病人も有ません、唯朝夕祈願致升る項目は始に國元にある父母の健固を保つ様次に我身も無病息災にして無恙教校を卒業して將來布教

上に充分功を奏する様三に世界一列の兄妹の者早く其罪を懺悔し改心して御道の信者と成様にと此三の者を懇請して居次第で御さい升と答へられ升た處、天野氏も轉た感慨に堪ざる者の如くなりしが程なく青年に篤く挨拶をして、堺に歸り升たが其よりは層一層の信念を高め朝未明に寢床を離るゝより御歌の聲勇く家内中其陽氣に勵されて一舉一動一進一退悉く主人の意志通り行れて仕事の成績は舊に倍して抄取品物の賣口は益々其度を高めるに付愈々御神徳の廣大なるに感じ 一くちばなしはひのきしんにほひばかりを、かけてをけ云御さとしを守て日日未信者を誘引致して居升、妻女は賢なりと雖流石は女性の心細く斯て人を救助る爲に財産の亡びては四人の愛子を如何にせんと氣遣その顔色に現はれるを見て天野氏は温顔之に諭して曰く、御身彼の天空に

飛ぶ鳥を觀られよ稼きもせず、穡せず亦倉廩にも蓄へず、然に神様は之を養ひ給ふに非すや、人間は萬物の靈長にして神様の最愛の子である、既に神様は鳥をすら養ひ給ふ、などて人間を養ひ給ざるの理あらんや且又我は四人の兒共の將來を思の餘り道に盡すのである今にして前生よりの罪業を減すに非らずんば未來永劫浮む瀨あるべからず、況や我親より受得たる財産を増殖事實に幾許である悉く之を子女に分與へて、我は出産の昔に戻り則赤裸體となりて靈救宣布の爲に身を捧げんとす御身之を承諾するや否やと、妻女又唯々として之を諾する者の如しと云ふ、餘り長席に成升から此邊で御免を蒙り升

講社宮遷の席に於て御話

なんでもでんちが、ほしひから、あたへはなにほどいとて、と御諭し下され升たが、今之を譬を以て御話を致升、皆様も御承知の通り新開港地なる吳門司等の各港は、其最初創業の際は一反の田甫の價格も五十圓或は百圓内外の者で有升たが、内外の形勢に明き極機敏なる商人は、自分の先祖傳來の壹反二百圓も三百圓もの價値のある良田を賣却して、吳門司等の要所要所の買占に掛る、すると人情は妙な者で其土着の愚民等も將來何十倍の高價に上ると云ことは本より知由は無れ共餘り買人の多きに附込、今迄百圓の價格の者が一躍して二百或は三百で無れば賣らぬと云ふ、買人の方は遠く海外良港の歴史に照らし近は横濱神戸等の美味を覺へて居から幾ら高價を示しても其には頓着せず、從來所有の田畑は無論家屋土藏等を抵當にして迄買込升た、すると

雪陰長旅の愚民共は大に驚きて、氣狂よ馬鹿よと嘲笑して止ざりしも果して十年の後には一坪が百圓即ち一反の價が參千圓以上と云ふ方外の高價に上たと云事は事實で御ざりませふ

で有から自己の素志を貫き大事業を成さんと欲する時は蛙鳴蟬騒の如き世上の批難抗撃は毫も意に止むべき者ではない、人は我を天理狂と云、然り我は氣狂なり氣狂と見らるるは實に我の幸福である、去れ共如何にせん我は未だ氣狂の資格が無いのである、釋迦も九十五種の外道より氣狂と謗らる、盜跖の徒は孔子を氣狂と哂る、基督も偽善者より氣狂と云はる、日蓮親鸞法然も異教徒よりは氣狂と罵倒せらる、我教祖は殊に大氣狂として其誹謗罵詈の聲は今に於て最も高し、去れば氣狂として批難の多き者は皆豪傑である聖人で有て氣狂として批難の

聲の卑き者は未だ其事業が社會に現れんからで有、吾は希は大氣狂となりて全世界より嘲笑せらる、日の早く來らん事を大神様に日頃祈念致して居る様な次第で御ざり升、皆様も早く氣狂に御成なさい、氣狂で無れば仕事は出来ません、氣ちがい、とは甲と乙との氣がちがうを云ふ、故に善人より惡人を見て氣狂と云ふ、惡人より善人を見て氣狂と云ふ、御道の布教師は人に諭すに妄に物の命を殺さぬ様、我身を愛する如く人の身も愛する様、吾兒を慈む如く人の子も可愛がる様、人の患を吾患の如くに憂ひ、人の歡喜を我歡喜の様に悦び、人を憐むには鰥寡孤獨の凡て便りなき者を先にし、飢ゑたる人を救ひ、凍へたる人に衣服を與へ、長途の歩行に勞れたる者仕事に疲れたる者を助くる様、蒸氣船や氣車の昇降の際病氣の人年老たる人、婦人兒共杯を助る

様、人の善を譽め人の過を隠し我善を誇らぬ様、両舌を吐ひて人の間
 を妨害ぬ様、徹頭徹尾御教祖の遺訓を守る様にと自らも履行し人にも
 諭とし、又貧窮の男女が病氣に罹り重症に陥りて醫師も手を離して殆
 と死に瀕せるの病人に同情を寄せて、神様の御威徳を以て其者の生命
 を救けんとするを淫社とか邪教とか氣狂とかあらゆる卑劣なる言語を
 列へて罵詈するるので御ざり升、古人も上智は教へられず下愚は遷ら
 ずと云て愚人の善に遷り難を歎息せらる、御教祖は人の必といふもの
 はうたがひぶかいものなるぞと、御歎き遊さる
 今晚は申迄もなく、宮遷として大神様の御分靈を新たらしき神床に齊ひ
 鎮め奉て、今日よりは朝に夕べに、種々の物を献て御恩報じを成さる
 ので御座りませふ

禁秘抄と云ふ書物は朝廷の日日の式作法を御示し成されたる者で御ざ
 り升が其發端に、禁中の事神事を先にし餘事を後にすと有升、畏多き
 事ながら何故に左程迄神様を大切に遊さるゝかと云に、我日本は開闢
 の始め、伊弉諾伊弉册の二神が天御中主神(國常立尊と異名同體)の御
 命令を請て天下國家を經營造作遊されて、遂に此國を天照大神に御授
 成され升た、大神は亦之を天忍穗耳尊に御傳へ遊され、尊は之を瓊瓊
 杵尊に、瓊々杵尊は之を彦火火出見尊に、其次は鷓鴣草葺不合尊に授
 け給ふ、之を地神五代と云て是の間實に數十萬年を経過したのじや僧
 に御座ひ升、其より人皇に成り神武天皇より二千五百有餘年の今日に
 至間皇統連綿として 今上御皇帝に至る皆是諾詔一尊の御末で御座ひ
 升、此より先天照大神皇孫瓊々杵尊に勅して宣く、葦原の千五百秋の

瑞穂の國は我子孫の王たる所なり、宜く爾皇孫就て治せよ寶祚の隆ま
 さん事天壤と窮なからんと、又大神御手に寶鏡をもち給ひて瓊杵尊
 に御授け成されて宣うには、吾兒此寶鏡を視さん事當に猶我を視る如
 くせよ更に又八阪瓊の曲玉と天の叢雲の劍を加へて、亦此鏡の如に分
 明なるを持て天下に照臨せよ、八阪瓊のひろがれるが如く曲妙を以て
 天下を治しめせ、猶神劍を引提て順ざる者を平げ給ひと勅り遊さる、
 此三種の神寶こそ皇統一種の基ひと成日本の腦髓精神となりた者で御
 さい升、偕て又曲玉は月様の精にして鏡は日様の體である、劍は星の
 氣なりと申傳へて居升が實に鏡は一物も蓄へず、私の心なく、萬物を
 照すに是非善惡のすがた現れずと云事なく其のすがたに隨て感應する
 を徳とす、是が正直の本源である、玉は柔和善順を徳とす是が慈悲の

本源である劍は剛利決斷を徳とす智慧の本源である是三徳を翕せ受ず
 して天下の治らん事殊に難かるべしと、北畠親房卿も論じて居升、鬼
 も角も神様と皇室とは斯の如き關係を以つて居升から神事則神様を奉
 祀事を第一にし余事則天下の政治を後にせらるゝので御さい升、政治
 の善惡は五千万人の生命に關るのである、其大事を措て先神様に事る
 と云事は物の本末輕重を明了にせらるゝ所以で有ませふ、又是が爲に
 國家が益々神様の御恩恵を受て進歩發達富國強兵の實が擧るので御座
 ひ升、決して政治を度外に措き國家を輕するのでは御さいません、還
 て國家人民を深く愛し給ふ所より神様を厚く尊崇せらるゝので有ませ
 ふ、三條の教憲にも敬神愛國の旨を體すべき事と云條目は抑第一條に
 置せらるゝと云は彼是相照らして天意のある所を仰ねば成ません、然

に世の醫者房頭學者教員の徒迄が御道を目して淫社なり邪教なりと云ふ、淫社か邪教か暫く之を措き、抑天理王尊と唱へ奉る神様は、國常立尊、國狹植尊、豐斟淳尊、大戸道之尊、大苦邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉册尊、月讀尊の十柱の神様を總稱して、天理王尊様と申奉るのである之を淫神と云ひ、此神様の教を邪教と云ふ、是恰も我正直なる實の父母を盗人呼はりするのと、かはりがない、斯る無頼漢を對手として辯論するの實に大人氣なきを信ず、然り辯論は致ませんが、併し其罪は實に惡むべき者である、此十柱の神様を邪神と云以上は萬世一系の神勅は邪神の邪言と云はねば成らぬ、三種の神寶は邪器である、代々の天子様は邪神の邪孫とでも云はねば成らぬ様になる斯る奴輩は亂臣賊子國家の毒虫である、糞虫である、亂臣賊子糞虫毒虫

の様な者は國外に放逐しても宜しふ御ざりませふ、併し糞虫退治は他日に譲り、御話は初に戻り升が、既に御當家も宮移せらるゝ以上は今日よりは成べく御教祖の足跡を踏み、鰥寡孤獨凡て便りなき者を救ひ又は病人を救くる爲には身命財産をも顧んほどの覺悟をもたねば成ません、神様の爲め人を救る爲には金錢物品を惜む様な事では、未だ氣狂には成れぬ、孔子易を讀で損易の卦に至て喟然として御歎息成れ升た處御弟子の子貢と云人怪で其故を問ひ升た處、孔子答て申さるゝに、は夫れ自ら損する者は益す、自ら益する者は缺く、吾是を以て嘆ずと自ら益すると云は貪欲である、ほしひ、をしひである、ほしひをしひは凡ての罪惡禍害の本源である、八埃の中の可愛と云ふ、我身を愛して人を愛せぬも、妄に人を憎むも、人の善事吉事を怨恨するも、針少

棒大に腹を立るも人に對して傲慢無禮なるも皆此貪欲が本となるのである、一身一家の禍も、一郡一國の禍も、皆貪欲が元である、源氏平家北條足利織田豊臣徳川も、其興は自ら損し即ち無欲を以て盛に成り其亡るは皆自ら益する即貪欲が原因である、故に勳功がなくて高祿を食む者、徳薄くして位階の貴き不意に財産を得たり、人より過分の稱譽を受る等、皆災難の伏する所である、功のないのに高祿を食むたり徳がないのに貴き位階を授りたりする時は、却て壽命が減ずるか、或は妻子眷屬を失ふか必ず禍の原因である、思ざる事にて澤山な財産を得たり分に過たる名譽を得たりする時は、禍の原因又は人に毀謗せらるゝの前兆である、若し謹慎し過て又は無欲に過ぎて災難に遇ふ此難は他日幸福の基ひである、人を恵み過ぎて怨讎を生ずるも此怨讎は必

ず人望の歸する基である、故に大なる欲ある者は凡て無欲にせねば成らん、自ら損せねば成らん
 今晚の宮遷も相當の費用を消すならん、是れ現に損である、参拜の人も家業を休で来る幾分か損である、右から左に御利益が見へぬけれ共此他日幸福の基ひで御座ひ升、十月に麥種を蒔四月に粃種を蒔皆損である右から收穫が無ひのである、然は農人は皆氣狂であるか、田畑に種を蒔農民が氣狂であれば吾も亦其氣狂に成たいのである、やしきは神の田地や蒔たるたねは皆はいる、自ら種を蒔は自ら刈取の權利がある、桃栗三年柿八年、遅ひか早いか蒔た種は皆實のである、其種蒔は凡て無欲を第一とす、御教祖は欲が有なら止てくれ、神の受とりできんから、實に欲は止めねば成ませんなんでも、田地がほしひから

あたへは何ほどいゝるとても、惜まらずに出して自ら損をせにやならん

布教熱心血の涙終

明治三十五年十月廿五日印刷
明治三十五年十一月七日發行

(定價金貳拾五錢)

著者 眞木 宥 馨

發行者 武田 福藏

大阪市東區南久太郎町四丁目八十六番屋敷
大阪市西區阿波座一番町六十番屋敷
大阪製本印刷株式會社代表者

印刷者 矢野 松吉

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島七番屋敷

販賣者 木下 松太郎

同 縣山邊郡丹波市町大字三島

同 今村 書店

同 縣山邊郡丹波市町大字三島

同 中田 書店

同 縣上郡帶解村大字今市一番地

同 木原 書店

不許復製

天理教を信仰なさる御方は左の廣告を是非御覽被下度し

明治三十五年十一月新版
祭典式、非祭式、行列、圖式、

●必携 天理教祝詞全書
正價金三拾八錢 郵税四錢

●明治三十五年十一月新版
布教熱心血の涙
同 金二拾錢 同 四錢

●必携 神道布教規範
特別正價金七錢 郵税四錢

●必携 神職布教道話
同 拾八錢 同 六錢

●文學士黒川真頼大人序
古事記講義 全三冊
特別實價金七十錢郵税拾六錢

贈正四位神道大家平田篤胤大元題字
福密願同官子爵海江田信義公題
●祝詞式講義 全壹冊
同 五拾五錢 同 八錢

●文學士中村清短大人序
織原抄講義 全貳冊
同 五拾五錢 同 八錢

●故大勳位入道官朝彦親王殿下御題
古語拾遺講義 全壹冊
特別定價 貳拾錢

●神道本局 稻葉君著
儀式 同
實價壹圓貳拾錢 郵税拾錢

●必携 尊神家大教宣布訓書義解 勅語挿入
特別正價金七錢 郵税四錢

●必携 尊神家三條教大憲義解 全壹冊
同 六錢 同 四錢

●日本神道天理教大意 全書冊
特別正價四錢 郵税二錢

●神官神道教導軌範 同
同 七錢 同 四錢

●天理教道話 同
同 三拾五錢 同 六錢

●破邪天理教根本實義 全
特別安價拾貳錢 郵税四錢

●御教祖御一代記 全書冊
同 拾八錢 郵税四錢

●天理人道はるは歌 同
正價壹圓五厘 郵税貳錢

●神道演說 同
特別安價八錢 郵税貳錢

●天理伊呂波歌 同
同 四錢 同 貳錢

●天理教開祖傳記 同
同 三錢五厘 同 貳錢

●教祖のをしる 同
同 貳錢 同 貳錢

●天理教與佛教 同
正價六錢 郵税二錢

●天理本部神樂の圖
同 八錢

●天理救助參考書
同 八錢

●病の元は心から
正價金三錢 郵税金二錢

●教心のゆくゝる
正價金九錢 大郵税四錢

●天理御一代唱歌
正價三錢 郵税二錢

●神國大道
同 七錢 同 二錢

●天理教布教之柱石
同金拾五錢 郵税二錢

●天理教眞實の御話
同 十五錢 同 二錢

●天理教眞實の御話 後編
同 二拾五錢 同 四錢

●神儒天理教討論演說 一名 布教家の玉手箱
同 金廿五錢 同 四錢

●神徳記
同 五拾錢 同 六錢

●神道天理教の話 全書冊
同 三錢 郵税二錢

●天理教哲學 同
特別安價二錢 郵税二錢

●神道本部祭式の圖
同 二錢

●神道教祖墓地圖
同 二錢

其他天理教教科書類色々並に墨筆精々安價に販賣可仕候
に付各國諸君右の廣告御覽の上御注文あらんとを願ふ

大和國山邊郡丹波市町大字三島
天理教會御本部門前

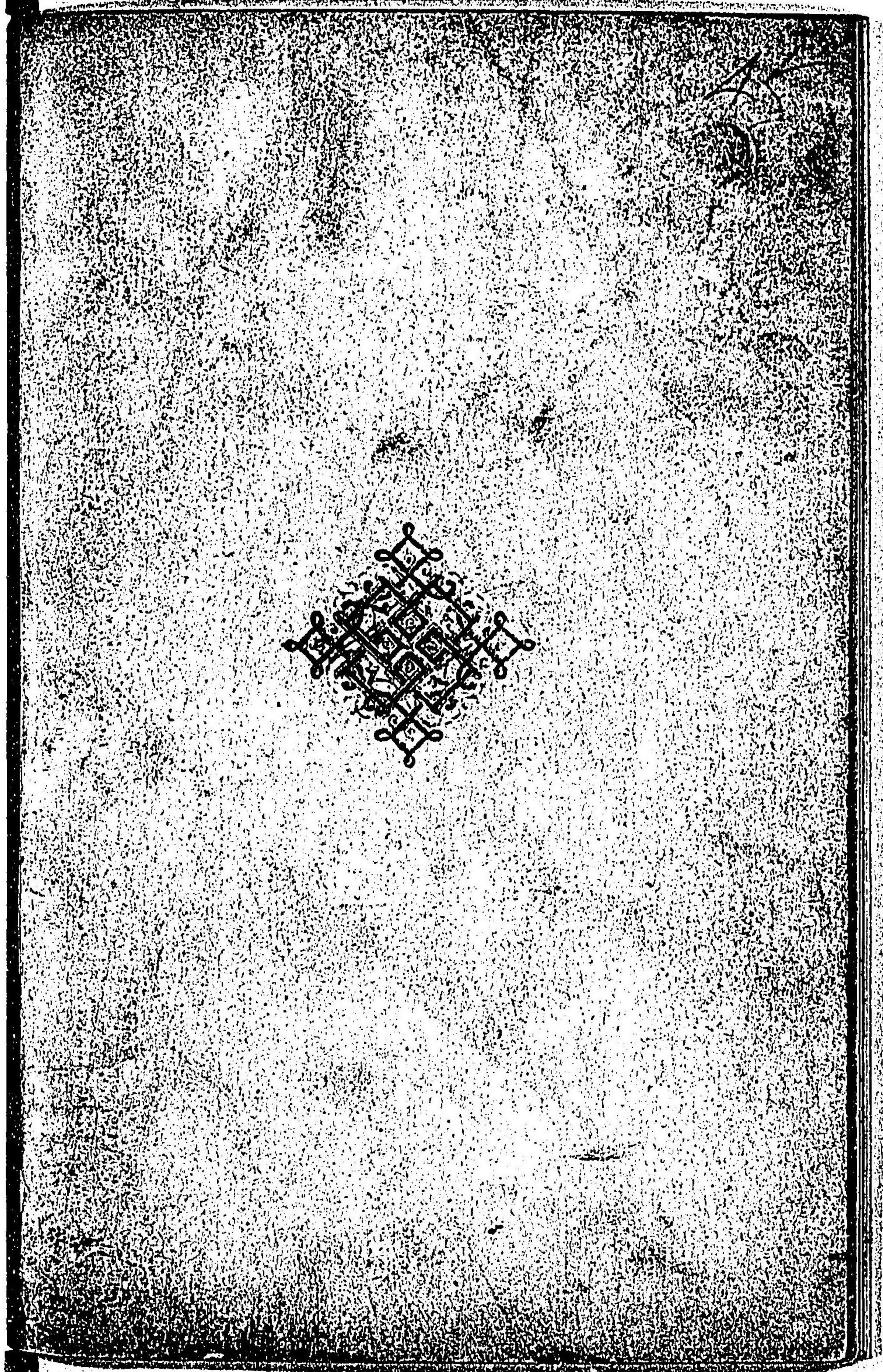
大賣捌書林

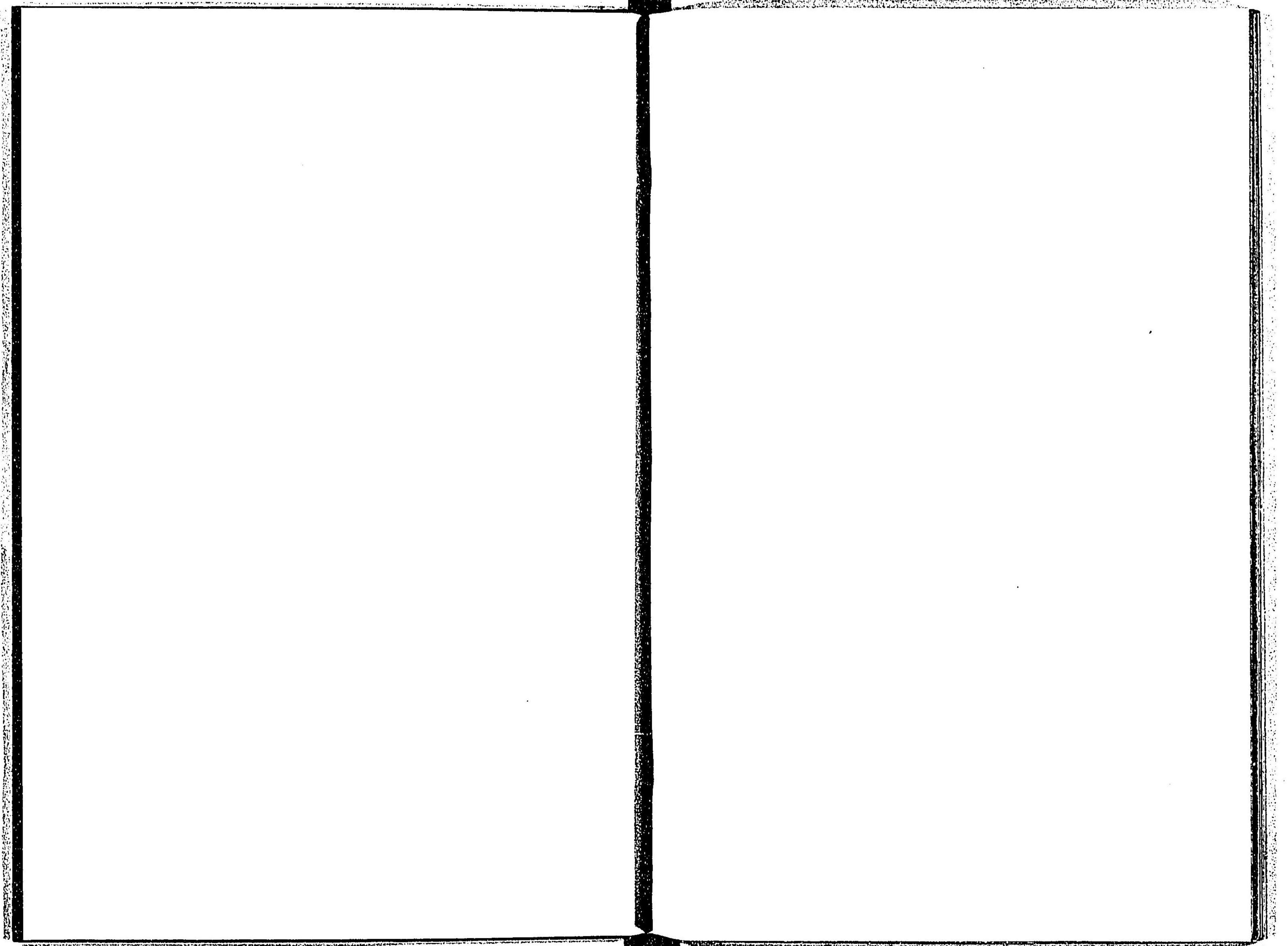
木下書店

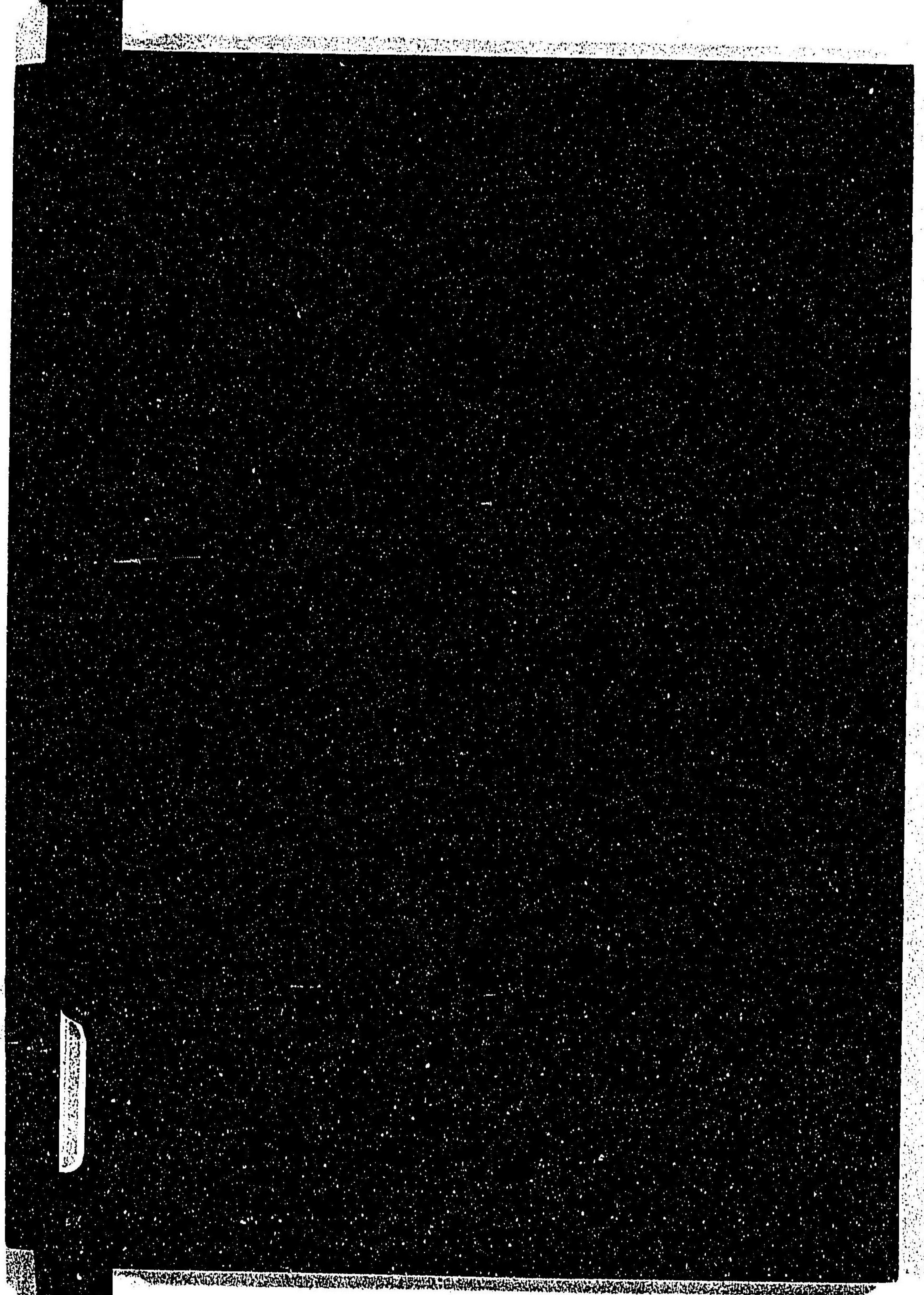
大和國山邊郡丹波市町大字三島
七番邸

同

今村書店







特18

32

布教熱心血の涙
真木宥馨

国立国会図書館

014578-000-3

特18-32

布教熱心血の涙

真木 宥馨 / 著

M35

ABB-0993



